
修学旅行

ニート

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

修学旅行

【Nコード】

N4645A

【作者名】

ニート

【あらすじ】

高2の修学旅行で、主人公は人生初の経験をする

(前書き)

微工口。中途半端。

登場人物

桜 サクラ ケイ 景男

結崎 ユイザキ 葉月女 ハツキ

紅井 アカイ 萌太男 ホウタ

高津 タカツ 由紀女 ユキ

その他諸々

本編↓高2の秋、俺たちは沖縄へ修学旅行に行く事となった。と言っても、10月の沖縄は暑さが最高潮になるようで、2学年の生徒全員が余り乗り気ではなかった。

俺は不運にも班の班長になってしまい、さらにやる気を無くしていた。

「何で沖縄になったんだろうな？」

親友で同じ班の萌太は計画表をたてている俺の横から顔を突っ込んできた。

「先生の独断だってよ」

俺が答えると、

「アタシ京都行きたかったなあ」

「ウチは仙台とか行きたかったあ」

俺たちの目の前で話してる二人は、これまた同じ班の結崎葉月と高津由紀。

二人共、クラスの中ではけっこう可愛い方の女の子だ。

実は、俺たち4人は小、中、高と、一緒の学校を生活してきた仲だ。だからといって、小・中学の時はこの女子2人とは全くといっていいほど接点が無く、高1の時も余り話したことがなかった。なので、これまた（何となく）やる気を失っていた。

「はあ」

ため息をつきながらも、なんとか完成させた計画表。いや、こういう場合、完成させてしまったと言うべきか。そんなこんなで旅行当日。

一日目は団体行動で、首里城見学や、海岸線をみんなで散歩など、くだらなく、つまらない1日目を終え、ホテルに向かった。

ロビーで注意事項を聞いたりなどして、部屋に直行する。

部屋はけっこう広く、男女4人同じ部屋で寝泊まりすることになっていた。この2点だけは先生に感謝した。

ベッドが2つ。後はとなりの座敷に布団を2つ引くとゆう構造だ。

部屋に入った瞬間、女子2人はベッドにしがみついた。

（はいはい、分かってますよ）

心をシンクロさせてそう思った俺と萌太は座敷の方に荷物を置いた。カーテンを開くと、女子2人が

「すご〜い」

と言いながら並んで窓を開けベランダに出た。夕日&絶景の海。どうやらこの部屋は一番の絶景ポイントらしい。これには俺も驚いた。しばらくして、夕食の時間がやって来た。

バイキング形式で、班のテーブルの上が料理でいっぱいになる。生徒会長が

「いただきます」

の挨拶をするというありきたりな方法で夕食を食べ始めた。バイキング形式のせいか、萌太はかなりの量を食べたらしく、

「もう動けません……」

などと、うなっていた。

夕食を終え、部屋に戻り、風呂の支度をしていると、

コンコン

入って来たのはとなりの班の班長だった。

「班長会始まるぞ!」

「分かってる。みんな、留守番頼むぞ!」

「はいはい」

俺は計画表と筆箱を持って部屋を出た。

30分後

「ただいまあ…あら?」

俺が部屋に戻ると、萌太しか、部屋にいなかった。

「あいつらは?」

「先に風呂いった」

「……………あそお」

そして俺たちも風呂へと向かった。

意外といい湯だった。

「いい湯だったなあ」

「疲れが一気に取れたような気がする……………おろ?」

広い廊下を歩いていると、目の前の自動販売機で飲み物を買う二人。
葉月と由紀だ。

「あ…」

「今風呂上がり?」

飲み物を手に葉月が聞いてくる。

「あ、ああ」情けない声で返答する俺…。

「景君達の分も買ってあるよ」

由紀が缶を2つ差し出す。

「お、さんくす!ほれ!」

萌太が俺の分もとって、俺に渡した。

「あんがと!」

俺は笑顔を作り、女子2人の方を向いて礼を言った。が、スタスタと女子2人はしゃべりながら部屋へ戻っていった。

ポン

俺の肩を叩いてにやける萌太。
俺はにやけ返した。

部屋について、俺と萌太は布団に寝ところがあった。布団が冷たくて、
気持ちがいい。

「ふぁ〜」

俺はあくびをする。

「何だよもう眠いのか？」

萌太が言う。俺は嫌な顔をした。

「何する気だよ」

すると、おもむろに枕を構えた萌太。

「やめてくれえ。ぐはぁっ」

悲願の願いもはかなく、俺は顔面に枕をくらった。

「痛っつ。野郎お」

俺は枕に回転をかけて投げた。

直撃。しかも頭ではなく、大事な所。

「はうああ…」

萌太は気絶。そのまま寝た。

葉月はあきれ果て、由紀はクスクス笑っていた。

「やられるくらいなら仕掛けて来んなっつの」

俺は歯を磨きに洗面所へと向かった。

「私達も寝よっかぁ」

「そうしょっか（笑）」

部屋の電気を消し、女子2人もベッドに潜り込んだ。

教訓…枕は当たるとけっこう痛い。

「ったく…」

歯を磨き終わり、部屋に戻ると真っ暗だった。

「二人も寝たのか…」

そう言う俺も布団に入った。疲れていたためすぐに眠ってしまった……。

……………午前2時

ふと俺は目が覚めた。起きてみると、やはり真っ暗で、みんな寝ていた。

俺はふと露天風呂の事を思い出した。

さっき風呂に入った時は、人が多く内風呂しか入れなかったのだ。

「行ってみるかな…」

俺は支度をして、鍵を持って部屋を出た……。

露天風呂

「っあゝ！気持ちいい」

露天風呂からは海が見えて最高……のはずがこの時間帯に海なんか見えるはずなく、露天風呂の明かりだけがついていた。「出来れば海見たかったなあ」

と、独り言を言っている俺。

ふと上を見ると雲が無く、満天の星空が見える。俺はしばらく空の光景に見とれていた。

(……………)

カラカラカラ…

んっ？ドアの開く音。しかも俺が入って来た方向とは違う方向のド

アだった。

(こんな時間に誰だろう?)

まあ俺もそんな時間に風呂に入っている変な奴なのだが。

反射的にその方を見る。

俺はその瞬間まで入って来たのは当然男性だと思っていた。

そして、次の瞬間俺は出来ればこの場所から立ち去りたかった。

「つつつ!?／＼／＼／」

入って来たのは葉月だった。体をタオルで隠し、桶で湯をすくって体にかけて。

チャプ…

湯につかる葉月。俺には気づいていないらしい……。俺は声にならない声を出してしまった。

「な…な…」

「あ…」

こっちに気づいた。

(……………)

沈黙が続く。

「ご、ごめん!」

俺は情けない声で誤って後ろを向いた。

(……………)

また沈黙。

重い…空気が重い……。

「ねえ」

沈黙を破ったのは葉月だった。

「いいよ、別に」

「……………あ、どうも……………!?!」

……………おかしいよね……………、今の返答。

「え、ええええええ!!!!」

「……………勘違いしないでね。」
「?」

混乱する僕に言ってくる。

「今見ちゃったことに対していいよって言ったの」
あ、そおゆうことね……………。……………あれ?ここって混浴だったの?
初めて気づく俺。

(……………)

再び沈黙。

「あ、俺出るよ」

俺はあがろうとする。

「なんで?」

……………だからおかしいでしょう、返答が。

「なんでって言われても……」

「別にいいじゃん。入っても背中向けてれば」

「でも……」

「でもない」

「……はい……」

断れない俺……。

俺は幸なのか不幸なのか……。

それともこんな幸せなシチュエーションを素直に喜べないただのバカなのか。

まあ、そんなこと考えながら俺は火照った頭の隅っこで、どうにかこの状況を切り抜ける方法を探っていた。

俺は言ってみる。

「星綺麗だね……」

「ねえ景君ってさあ、彼女とかいるの？」

いるわけないでしょう。つかシカトかよっ!! (三村風)

俺は、

「いないけど」

と頭をかきながら言った。

「ふうん」

……ふうんって……。――――

「……俺そろそろ……」

「待って」「ん？ふむっ」

（……………）呼吸ができない。

俺は我に返ると二人の唇が重なっていたことに啞然とした。

／／／／／／／／／／／／／／／／

葉月が俺を押し倒す。と同時に露天風呂の明かりが消えた……。

俺は混乱しながらも葉月の背中に左手を回し、右手で胸を揉んだ

すると、

「だぁめ」

「!？」

右手が弾かれた。目が慣れてきて、葉月の姿が良く見えるようになってきた。

「景君…、あたしの事好き？」

「それは……」

普通なら

「好き」

と言って、先ほどの続きを始めるだろうが、俺は言えなかった。

「嫌い……？」

「そんなことないよ……」

俺は彼女にキスをして、彼女を体の上からどかした。

俺は彼女にタオルを渡し、隣に座った。

「……………」

「景君、私と付き合ってくれない？／／／」

告白。人生初の告白。

葉月の恥じらいの顔が可愛く思えた。

「いいよ」

俺はまた唇を重ねた。

明かりが無くても星の明かりで暗いとは思えないくらいになっていた。

終わり

(後書き)

変なの書いてすみません

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4645a/>

修学旅行

2011年10月3日03時20分発行